



### おくすり相談 Q&A



薬剤師 坂田 修一

### 分子標的治療薬!?

分子標的治療薬!? あまり聞き慣れない言葉かもしれませんが、最近のがん治療において、とても重要な役割を担っているお薬です。従来の抗がん剤の多くは、がん細胞だけでなく正常細胞も傷つけてしまうため、白血球が減少したり脱毛を起こしたりと多くの副作用が生じていました。分子標的治療薬は、がんが持つ悪い性質（異常に増える、周りの組織を侵す、転移する、細胞死しにくいなど）に注目し、がんの遺伝子や遺伝子の命令によって作られる物質をピンポイントで攻撃します。そのため、がん細胞に対する選択性が高く、副作用が少ないといった特徴があります。

また、お薬の作り方も異なります。従来は、抗がん作用がある物質のメカニズムを解明してお薬を作りました。分子標的治療薬は、はじめにターゲット（標的分子）を決めてから、作ったお薬の抗がん効果を確認めるのです。

現在、手術や放射線療法、従来の抗がん剤を組み合わせる白血病、悪性リンパ腫、乳がん、肺がんの一部で治療効果を上げています。そして大腸がん、膵がん、腎がん、頭頸部がんにも効果のあるお薬を開発中です。分子生物学の進歩により、未来のお薬が現実になりつつあります。

## アラカルト

### 紫外線って何ですか？

紫外線にはUV-A、UV-B、UV-Cがあります。UV-Aは浴びると肌が黒くなり、光老化といわれるシミ、しわのもとになります。UV-Bは肌が赤くなり、ひどいと水ぶくれになり、大量に浴びると皮膚がんや白内障を引き起こすことがあります。UV-Cは最も危険で「殺菌光線」と呼ばれていますが、オゾン層により吸収されてしまうので地上には届きません。

UV-Aは太陽の高くなる5月が最も多くなり、最も少ないとされる冬の時期でも多い時の2分



薬剤師 小嶋 郁子

の1にしかならないため、年間を通して紫外線対策をする必要があります。一方、UV-Bはオゾン量の減る8月が最も多くなります。最近では、オゾン層の破壊に伴う今後の紫外線増加が問題になっています。

紫外線を予防するには、太陽に当たらないことが一番です。しかし、UV-Aは波長が長いのでガラスなどを通過し、車内や室内にも届いてしまいます。日焼け止め化粧品、日傘、帽子などを活用して紫外線に当たらない対策をすることが大切です。